



ポストエディット受託側から見た 問題点

2020/12/02 AAMT, ONLINE

成田 崇宏(株式会社ホンヤク社)

恒川 正志(個人翻訳者)

自己紹介（簡単な経歴、MT/PEとの関わりなど）

➤ 成田 崇宏（株式会社ホンヤク社）

➤ 恒川 正志（個人翻訳者）

ズバリ「受託側から見た問題点」とは

● ひと言でいえば「翻訳会社の仕切りの問題」

顧客
の声

①顧客の過大な期待を仕切れない

⇒「AI使えば安くなるんでしょ?」「他社はMT使えばやれるって言ってるよ?」

社内
の声

②技術的な問題を仕切れない

⇒「顧客指定のCATでやらないと。でもどうやる?」「用語はどう反映する? タグ処理は?」

訳者
の声

③案件の落としどころ(QCDのバランスの付け方)を仕切れない

⇒「このMT出力でその仕上りレベルを求めるの?」「しかも納期と料金は翻訳の7割で?」

訳者
の声

をより詳しく

PEのメリット

- ・訳文ブラッシュアップ作業に専念できる ※MT出力時での専門用語反映が前提
- ・大きな修正が不要／少ない部分での省力化・時間短縮

PEの問題点・懸念事項

- ・MT出力の質によりコスト削減のしわ寄せがPEに来る可能性あり
- ・クライアントの要望が低コスト・短納期であった場合、品質を低めに設定し、それに合わせて妥協しなければならないという(訳者としての)ジレンマ

翻訳者／ポストエディターは翻訳会社に何を求める？

➤ 当該案件におけるMT/PE工程の適否

翻訳会社は、MTエンジンの特性や出力品質の評価、作業プラットフォームが本件に適したものかを見極めができていますか？ この案件はMTでやるべきか？

➤ 合理的な仕事内容・条件

PEの納期・料金・作業要件が、想定される実工数に基づいて合理的に定められているか？

➤ 目標地点の合意

仕上がりイメージについて、エンドクライアントと翻訳会社が同じものを共有できているか？

翻訳者／ポストエディターにきちんと向き合わないと・・・

- PE業務の魅力がなくなる(やりがいも報酬も)
- PEをやりたい人・やれる人がいなくなる
- PEとは、本来は「翻訳品質の適切な見極めができる人のみが行える特別な仕事」のはず。不適切な運用が翻訳業界全体の品質体系の崩落を招きかねない

翻訳会社はどうしていくべきか その①

● 「持続可能」にするという意識

顧客:「早い/安い/良い」を求め
るのは当然。ITを駆使してもっ
と品質向上と工数削減して!

作業者:MTは魔法の箱じゃな
い! PEでその尻拭いを
すべてさせるなんて!!

- 顧客の要望に応えるのは当然だが、同時に翻訳者の立場に立って仕切るべき(翻訳者は翻訳会社としかコミュニケーションできない)

⇒三方(顧客・翻訳者・翻訳会社)良しを目指そう!

翻訳会社はどうしていきべきか その②

●具体的な仕切り方、バランスのとり方

①顧客の過大な期待の仕切り方 ⇒メリット・デメリット、MT/PE適否の提示

「AI翻訳は、使い方を間違えると案件に逆効果です」

「本件をMT/PEで行うと、良い点は〇〇ですが、代わりに××というリスクがあります」

②技術的な問題の仕切り方 ⇒エンジンやプラットフォームの研究

「顧客指定のCATだとこの機能がないから、同エンジン対応の別ツールで作業しよう」

「タグや用語はQAツールを使ってミスの検出や統一を図ろう」

③案件の落としどころの仕切り方 ⇒QCDバランスと顧客ニーズのマッチング

「本件は、エンドユーザーは★★で、仕様や要件としては◇◇を満たせば問題ないので、作業者は●●名で行って、■●円で、〇月△日までにお納め可能です」

★業界全体として ⇒ISOの浸透、それに基づくSLA制定、各案件でのSOW明確化₈...

ポストエディットについて、より中長期的な視点で

- メリットである「ブラッシュアップに専念」「省力化・時間短縮」を今後さらに高められれば、より多くの翻訳者・翻訳者志願者にとってPEが魅力のある仕事になるか？
- ほかにメリットとなり得る要素はあるか？
- そのために翻訳会社が行うべき環境整備とは？